



座談会 青少年×総合型クラブ×スポーツ少年団



「青少年と考える運動部活動の地域移行」



Part.1

運動部活動の地域移行について、直近の中学校部活動経験者である高校生や大学生からの意見を聞くことで、子どもたちが求めている望ましい部活動の在り方について改めて考えることを目的としてオンライン形式の座談会を実施しました。

Part.1の今回は、青少年の2人から「運動部活動の地域移行」に関する印象や期待を聞くとともに、総合型クラブとスポーツ少年団の取り組み事例を紹介しています。

※Part.2は次号(11月号)掲載予定です。

●座談会メンバー●



コーディネーター

小出 利一 氏

総合型地域スポーツクラブ全国協議会 広報部会 部会長
総合型地域スポーツクラブ全国協議会 常任幹事
NPO法人新町スポーツクラブ(群馬県) 理事長



渡辺 靖代 氏

スポーツリンク白川(岐阜県) クラブマネージャー

1999年から現在にかけて、運動部活動に関わる様々な人・団体と連携し、部活動の地域移行に取り組んでいる。



松原 三郎 氏

大沢ベースボールクラブスポーツ少年団(宮城県) 指導者

スポーツ少年団で20年間にわたり指導を行う。
現在は地元中学校の野球部と連携している。



真利谷 公佑 氏

森河内第1スポーツ少年団所属

大阪府リーダー会 会長(シニア・リーダー※)

大学3回生

部活動:テニス部



霧羽 優芽 氏

森河内第1スポーツ少年団所属

大阪府リーダー会 副会長(シニア・リーダー※)

高校2年生

部活動:剣道部

※リーダーとは、日本スポーツ少年団が育成している、各単位スポーツ少年団の活動における団員のまとめ役や、指導者と協力してチームを育てていく役割を担うスポーツ少年団員

<https://www.japan-sports.or.jp/club/tabid275.html>

●目次●

- 1) 運動部活動の地域移行に関する検討会議提言の概要について
- 2) 青少年にとっての「運動部活動の地域移行」に対する印象や期待
 - 部活動で楽しかったこと
 - 指導者へ望むこと、外部指導者への希望
 - 今後、地域スポーツへ望むこと
- 3) 総合型クラブの取り組み
 - スポーツリンク白川での取り組み
 - 部活動連携のきっかけ、総合型クラブの設立
 - 学校、部活、保護者、指導者、総合型クラブの連携(部活動育成会)
 - チームの活動目標を共有！ ドリームシートの作成
 - 連携に欠かせない行政側からの協力
 - 生徒が選択できる自由な部活動の形
- 4) スポーツ少年団の取り組み
 - 大沢ベースボールクラブスポーツ少年団での取り組み
 - 部活動連携のきっかけ、学校との連携
 - 生徒たちのモチベーションに合わせた指導
 - 生徒が掲げた目標に向けてのサポート
- 5) 部活動連携に関する話を聞いた青少年の感想

1) 運動部活動の地域移行に関する検討会議提言の概要について

※運動部活動の地域移行に関する検討会議提言（スポーツ庁HP）



- 誰もが参加しやすい運動、文化部活動
- 複数の活動を経験できる活動日数や時間
- 活動時間の適正化
- 指導体制の見直し
- 地域のスポーツ団体等との連携・協働

小出（「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」の概要資料を基に解説した後）

主役となる青少年から意見を聞く機会がなく、提言がまとめられたことに、私としては不満を感じていました。今回の座談会では、大人だけでなく青少年の方にも参加していただき、子どもたちが求めている望ましい運動部活動の在り方について考えるきっかけとなればと考えています。

また、提言では、地域移行した受け皿団体の「評価基準」がなく、「誰もが参加しやすい活動になっているか」「複数の活動ができる環境があるのか」「競技性に偏っていないか」などの確認が必要だと思っています。そのようなことも考えながら、皆さんと意見交換ができればと考えています。

2) 青少年にとっての「運動部活動の地域移行」に対する印象や期待

部活動で楽しかったこと

小出 最初に、真利谷さんと靄羽さんがスポーツ少年団で活動されてきた中で、楽しかったことや、印象に残った出来事について教えてください。

真利谷 私の所属団は野外活動を中心に活動しており、例えば、登山とか、地域の小学校を利用してキャンプファイヤーで一泊したりとか、普段あまり経験できない活動なので楽しい思い出が強いです。他には、社会見学みたいな形で他の施設に行くこともあります。1ヶ月に1回しか行事はありませんが、普段できないことを経験させてもらい、非日常的な部分の印象が強いです。



靄羽 私は、スポーツ少年団の全国交流大会（茨城県）に参加した時に、いろんな都道府県の方々との交流や障がい者スポーツを経験し、障がい者の方々がこうやってスポーツをされていることを知ることができたのが一番印象に残っています。

小出 お二人は学校部活動では何をやられていましたか。

真利谷 中高ともにテニス部に所属していました。

小出 楽しかったことを覚えていますか。

真利谷 大会での勝利も楽しい記憶の一つですが、日々友達と楽しんでワイワイ練習するのが一番楽しかったです。

靄羽 剣道部に所属していました。違うクラスの人と交流できるのが部活動だと思います。いろんなことを話したりして仲良くなれる機会が部活動でもあり、それが私としては楽しかったです。

指導者へ望むこと、外部指導者への希望

小出 学校部活動で何かこうなってくれたら良かったということはありませんか。



真利谷氏
「こう指導してくれたらと思うときに顧問が不在。ここが課題」

鶴羽氏

「平日は指導者不在。きっちり教えてくれる監督がほしい」



真利谷 部活の顧問が会議で時々いなくなり、顧問がいないところで練習することがあり、少し寂しい面もありました。こう指導してくれたらと思うときに顧問が不在でした。このあたりが課題と感じました。

鶴羽 長年顧問をやってくれた先生が昨年退職され、代わりに若い先生が教えてくれることになりましたが、その先生が担任を持つことになり顧問ができなくなり、監督不在となりました。別の方に監督として来てもらいましたが、その監督も諸事情で来られなくなり、平日は部員が主体となっている状態で、指導者不在でメニューをこなしている状況です。きっちり教えてくれる監督がいてくれたらいいなと思います。

小出 部活と少年団を両立される中で、どちらもいい点があると思います。また、ここが違うから両方おもしろいという点があれば教えてください。

真利谷 部活動は大会で勝つという目的があると思いますが、自分が所属しているところは、そういう感じはなく、息抜きみたいな楽しめる場所でもあったので両立できて良かったと感じています。

小出 先ほど鶴羽さんは、学校の先生がいないときに自分たちでメニューをこなしたと言いましたが、部活動の指導者が学校の先生じゃなくなる可能性があります。この点はどう思いますか。

鶴羽 剣道は5段から先生になれますが、部活の若い先生はまだ3段です。でも教えたいから顧問として来てくれています。技量がちゃんとした人から教えてもらう方が自分の身にもなるので、外部指導者になるのはいいなと思います。

今後、地域スポーツへ望むこと

小出 これから先、部活動や地域のスポーツが若い人たちにとってどういう形になったら楽しいのか、あるいはこんな場所がほしいなというのがあったら教えてください。

真利谷氏

「子どもが楽しめる場所が一番」



霧羽氏

「いろんな方々との交流が大切」

真利谷 大前提として子どもが楽しめる場所が一番なのかなと思います。雰囲気づくりとか、施設・設備とかも良ければ子どもたちもより練習に励むし、それが一つの楽しみであって、子どもが部活動に行きたいと思えるような環境が大事だと思います。

霧羽 コロナ禍もあって私の学校は他校との交流がありません。昔の先生は考えが古いと言ったら表現が悪いですが、自分の学校だけでいくというのが強かったので、他の学校との関わりがありません。やはり他校との交流があった方が人間の幅が広がるし、いろんな方々との交流が大切だと思います。

3) 総合型クラブの取り組み

スポーツリンク白川での取り組み

小出 学生のお二人からいろんな意見を聞くことができました。続いて、岐阜県白川町にある総合型地域スポーツクラブのスポーツリンク白川で部活動との連携に取り組んでいる渡辺さんにお話しいただきます。

※スポーツリンク白川の活動については、メールマガジン9月号でも紹介しています。

https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/kurabuikusei/MailMagazine/R4/MM162_shirakawa.pdf

部活動連携のきっかけ、総合型クラブの設立

渡辺 現在、スポーツリンク白川は地元の白川中学校(白川中)と連携しています。その連携を始めるまでの経緯についてお話しいたします。

1999年の白川中では、ソフトボール部の顧問の先生が競技未経験者だったことから、部活動で技術が向上しないという声が保護者から出たため、部活の後に延長で保護者によりソフトボールの指導をさせてもらえないか校長先生に掛け合ってお願ひしたのが学校との最初のつながりでした。

白川中の場合は学校の授業が終わってから5時から7時までの2時間が空白の時間で、7時から夜間体育施設といって一般の大人の方が中学のグラウンドと体育館を使用して大人の活動をしていました。この2時間の空白があるので、この2時間を使って活動させてもらえないかということで、保護者による部活が始まったのが1999年です。

ソフトボール部をきっかけに他部からも希望があり、部活の後に続けて活動するという動きが徐々に始まっていきました。

責任の所在が曖昧だった延長部活を総合型クラブの活動に

2009年に総合型クラブとしてスポーツリンク白川がスタートし、延長部活中のケガや事故などの責任の所在に関する問題を解決するために、延長部活を総合型クラブの活動にしました。

学校、部活、保護者、指導者、総合型クラブの連携(部活動育成会)

顧問の先生と地域指導者の連携体制の構築

次に問題として出てきたのは、競技経験のない先生が顧問の場合は、地域の指導者がいれば技術が上がっていいのですが、新たに競技経験のある先生が来ると、地域の指導者の人と顧問の先生の言うことが違ったということが起きて、生徒の中で「どっちのことを聞けばいいかわからない」といったような声があったりします。また指導者によっては勝つことが全てみたいな感じで、レギュラー中心の練習になってしまい、レギュラー以外の方は球拾いとか裏方に回るといった状況もありました。そういったところを整えていこうということで、中学校とクラブとで年に2回の部活動育成会を開くようになりました。

この部活動育成会ですが、顧問の先生、各部活動の保護者会長、クラブの事務局、そして地域の指導者が一堂に会します。スポーツクラブ活動規約というルールがあり、どういうふうに参加していいか、勝ちにこだわらず楽しく、そして体ができていく3年間なのでやり過ぎた活動にならないように、活動日数とか活動時間もルールとして決めようという規約になっています。



チームの活動目標を共有！ ドリームシートの作成

次にドリームシートというものも作成しています。顧問の先生と地域の指導者の言うことが違うと一番困るのが生徒なので、このチームは何のために1年間頑張るのかという活動の目標をドリームシートに書いてもらっています。3年生が引退して2年生の新チームになるタイミングで部活動育成会を開き、顧問の先生と保護者会長、地域の指導者でドリームシートをつくってもらいます。生徒のレベル感や目的に合わせてその年その年で目標設定を変えるということをしています。その上で、クラブでの活動の際には地域の指導者はどういうことをするのか、そして顧問の先生はどういうことをするのかを明確にし、それに携わる指導者の名前だけでなく、資格を持っていれば資格名を書いてもらっています。そうすることによって誰が指導しているのかきっちり分かる仕組みになっています。

連携に欠かせない行政側からの協力

次に白川町の教育委員会や学校をまとめている機関との連携について説明します。現在、岐阜県白川町の白川中の生徒は各学年1クラスで、どんどん生徒数が減っている状態です。そのため、白川町にある佐見中学校(佐見中)が白川中に合併され、4月から佐見中の生徒が毎日バスで40～50分かけて白川中まで通うことになりました。部活が終わってから佐見地区へ行く下校バスというのがありますが、佐見地区の生徒が部活の後にクラブの活動をやろうとすると、19時にクラブの活動が終わって佐見地区に帰り着くのが20時になります。当初、行政からは、帰りが遅いため佐見地区の生徒はクラブの活動への参加は無しにしようという意見がありました。しかし、佐見中だけで活動していたときよりも活動の種類や範囲が広がるというようなメリットもあり、保護者そして生徒から、佐見地区の生徒もクラブの活動がしたいという要望が出たのです。現在は部活が終わった後の佐見行きの下校バスと、クラブの活動が終わってからの「スポリンバス」、この二つのバスを行政の方から無料で出してもらっています。

先ほど学生のお二人から、部活動をやる上で施設とか設備も大切という声が出ました。スポーツリンク白川の活動は学校部活動に続いてやっているため、白川中の生徒は全員そのまま学校の体育館とかグラウンドを使用できるほか、地域のクラブ活動になっても備品はそのまま使っているという許可ももらっています。ただし、その間の責任はクラブがもつことになっています。例えばバレーでアンテナを折ってしまったり、ボールがコンセントカバーに当たってコンセントが破損したり、生徒がケガをしたとかいう場合には、全てクラブの事務局に連絡がきて対応をしています。

生徒が選択できる自由な部活動の形

今、部活動への参加は自由です。白川中の生徒の活動パターンは下記図1の6パターンになります。一つの種目を続けたいと思う生徒もいれば、多種目とかいろんなスポーツをやりたいという生徒もいるし、あまりスポーツとか好きじゃないからやらない生徒もいます。

1999年からずっと連携している中で現在の白川中の生徒の動きを見ると、7割の生徒が一つの種目を3年間続けてやっていきたいという思いが強いのかなと感じます。

	部活動	クラブ	白川中生徒109人
①		× 	76人 部活と同じ（72%）
②		× 	5人 廃部になった種目（4%）
③	所属無し	× 	5人 部活はやらず廃部になった種目のみ（4%）
④		× 活動無し	15人 部活だけ（13%）
⑤	所属無し	× 	1人 部活にない種目を総合型で（0.9%）
⑥	所属無し	× 活動無し	7人 クラブチーム、家庭・身体の都合（6%）

図1 白川中学校での活動パターン



渡辺氏

「中学生を取り巻く環境が1年ずつ変わっていく中で、切れ目がないように子どもたちを見続けています」

いつも思っていることがあります。子どもを取り巻く環境が毎年変わってしまうということです。中学校の先生は3年間で変わってってしまうので、4月になると顧問が変わったり、ずっと教えてくれた先生が異動になっていなくなるケースもあります。保護者についても、自分の子が夏の大会で引退するとメンバーがガラッと変わってしまいます。一生懸命やる保護者と引き気味の保護者の方もいたりして、その年々で保護者の熱意も違います。

地域の指導者とも、1年更新という形をとっており、1年ごとに区切りがあります。白川町の役場、教育委員会の職員の人も3年くらいで変わってってしまうので、中学生を取り巻く環境が1年ずつ少しずつ変わっていく中で、スポーツリンク白川が切れ目がないように子どもたちを見続けていきたいと思えます。

4) スポーツ少年団の取り組み

小出 次はスポーツ少年団の取り組みをご紹介しますが、まず、ドイツにあるスポーツクラブについて説明いたします。種目は単一種目かもしれませんが、幼児から高齢者まで多世代に渡りスポーツによって地域のコミュニケーションを取るという組織がドイツのスポーツクラブです。それと同じようなスポーツクラブを日本にもつくろうという考えで、総合型地域スポーツクラブの育成が始まりました。また、ドイツのスポーツクラブの6歳から27歳がスポーツユースの団員です。つまり一つの組織の中の青少年世代のことをユースと呼んでいます。現在3歳から団員になれるスポーツ少年団はドイツスポーツユースが見本です。スポーツ少年団とクラブは本来考え方が似ていて、ほぼ同じようなものと思っています。ただしスポーツ少年団の場合は、現時点ではある一定の青少年だけで活動しているケースが多いと感じています。

大沢ベースボールクラブスポーツ少年団での取り組み

今の渡辺さんのお話は総合型クラブにおける取り組みでした。次に松原さんからスポーツ少年団での取り組みをお聞きます。それでは松原さん、よろしくお願いします。

部活動連携のきっかけ、学校との連携

部活とスポ少で野球を指導

一番大事なのは学校との連携 部活動とスポ少の理念を共有

松原 私は40年前から野球に携わっております。元々、高校野球の監督をやらせてもらい、その流れの中で息子たちが中学校にいる時に父兄の人たちからスポーツ少年団を立ち上げてほしいと言われ、スポーツ少年団に携わるようになりました。

月曜から金曜が部活、土日はスポーツ少年団

21年前の話ですが、部活動の先生に野球経験がないということで、少なからず経験のある私に指導の依頼がきたというのが部活動連携のきっかけです。その頃から既に土日に関してはスポ少、月曜から金曜まで部活という形の中で20年間やらせていただいています。学校側と子どもたち、100%リンクするわけではなく、先ほどの渡辺さんのお話しにあったように、部活は野球をやっているけど週末はスポ少に入らないという生徒も中にはおりました。こうした中で一番大事にしたのが学校との連携です。校長も顧問の先生も異動で変わるので、その都度校長室におじゃまして校長と顧問の先生を交えて、本来の部活動やスポ少の理念を共有させていただきました。また、保護者の方々との協力体制をつくり、地域と学校と保護者とみんなで子どもたちを育てるという理念の中でずっとやってきました。



小出 松原さん、高校野球の監督をやられて甲子園を目指していましたか。

松原 はい、そうです。おかげさまでコーチ時代に甲子園を踏ませていただきました。

小出 そういう経験がある中で、中学生を指導するにあたって気をつけたことはありますか。

松原 渡辺さんから、指導者によって指導方法が違うことで子どもたちが迷ってしまうという話がありました。私の指導ですが、技術的なことはあまり言いません。私から教えることはないです。子どもたちから聞いてくるケースが多いです。

小出 見守っている指導者という感覚でしょうか。

松原 子どもたちの想いを引き出すあおり役ですかね。子どもたちが上手になりたいとか、強くなりたいとか、野球を通じて成長したいとか、そういうふうにもってもらえそうですね。

小出 中学生の部活動とスポーツ少年団の活動と連携して活動されておりますが、中学校になってから野球を始める生徒はいらっしゃいますか。

松原 毎年入ってきます。

小出 そのような生徒と、小学生時代から野球をやっていた生徒たちと当然いろんな差があるでしょう。その差をどうやって徐々に埋めていくようにされてますでしょうか。

生徒たちのモチベーションに合わせた指導

松原氏

「モチベーションの幅がある中で、それぞれが満足する時間と場所を」



松原 高校野球のようにモチベーションがみんな同じではないので、そのモチベーションの幅がある中で、みんなを満足させることができる、それが指導者の役目だと思います。有名私立高校に行って甲子園を目指し、大学に行ってプロを目指すという中学生もいました。小学校時代全く野球をやったことがなく中学から始める生徒もいます。その生徒も満足し、高みを目指している生徒も満足する時間と場所がなければいけないと思っています。生徒に分かりやすく、かみくだいて話すと、高みを目指している生徒にとっては不満な時間と場所になってしまうので、そのあたりを融合させています。もしくは一緒に手伝ってもらっている指導者がいるので、その方と役割分担して、それぞれが満足する時間と場所を考えるようにしています。

小出 今年の夏、中学3年生が競技から離れ中学1、2年生だけになると思います。今、部員は何人ですか。

松原 1、2年生で18人です。

小出 われわれの時代は、中学1、2年生の頃は球拾いというイメージがあり、スポーツができないという時代でした。ずっと補欠の生徒と、高みを目指している生徒との間のギャップはどう埋めていますか。

生徒が掲げた目標に向けてのサポート



松原氏

「生徒たちが掲げた目標に向かってお手伝いするのが大人の役目」

松原 レギュラーの生徒、レギュラーでない生徒、ゲームに出る出ないの前に目標と目的という話を生徒にしています。グラウンドに来る、スポーツをしに来る目的って何でしょうねという中で、生徒が「試合に勝ちたい」という目標を立てた場合、これはあくまで目標で生徒たちが掲げるものであり、私が掲げるものではありません。ですので、生徒たちが掲げた目標に向かってお手伝いするのが大人の役目だと思っています。野球をする、スポーツをする目的というところに時間をかけて、親も含めて話しています。「試合に出ることだけが素敵なことではない。試合に出なかったけれども今日あなたは素敵だったよ。何故ならここに至るまでのプロセスの中で、あなたがいたおかげで今日彼はヒットを打つことができた」というような話を大切にしています。

小出 松原さんみたいな指導者の下で野球ができて幸せですね。

松原 毎年、送別会をやりますが、生徒の一人に、とてもインパクトのあるお別れの言葉をいただきました。「世の中で松原さんほど怖い人間に出会ったことがない。だけでも世の中で松原さん以上に優しい人も出会ったことがない」と言われました。

すごく嬉しかったです。私にとって一番の宝物になりました。

小出 それ(松原さんの教え)が分かってくれているからモチベーションが違っていても一つのチームとして同じ方向に向かっていていると思います。

松原 地元の高校野球部に卒業生8人が入り、残念ながら甲子園には行けませんでした。昨日8人全員が来てくれて、中学生と一緒に紅白戦をやりました。8人のうち3人が中学から野球を始めて高校の3年間も野球を続けました。一応、タクトを振る役目の人間が必要なので、私がその役目をおおせつかっているだけです。大人って何のためにいるのか、それが私の一番の基本となっております。

大人って子どもたちのためにいるんだと思います。われわれが子どもの頃、大人から教わって大きくなったので、上から教わったエキスを、今度は私たちが今の子どもたちにマッチした形で伝えていくことによって、先代よりもわれわれの時代、そして、われわれよりも次の世代の人たちがスポーツを通じて豊かになっていくことが一番の目的だと常々思っています。



小出 中学の部活動とスポーツ少年団の活動ですが、時間や曜日の振り分けは決まっていますか。

松原 白川の渡辺さんのように一日の中で部活とスポーツ少年団の活動を分けるのではなく、月曜から金曜までは部活で、土日はスポ少です。ただし、部活で組んだ週末の練習試合には私も混ざっています。というのは仙台市の教育委員会から外部指導者として認可をいただいているので、部活にも参加できるし、週末は顧問の先生と一緒にベンチに入って生徒たちと試合に臨んでいます。

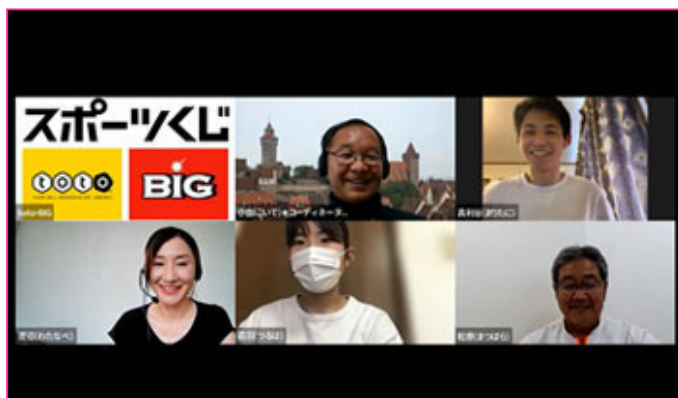
5) 部活動連携に関する話を聞いた青少年の感想

小出 真利谷さんと鶴羽さんにお聞きします。渡辺さん、松原さんからのお話を聞いて、印象に残ったことを教えてください。

鶴羽 印象に残ったのは、渡辺さんがおっしゃっていた指導者によって話すことが違う点です。私も経験しましたが、監督の方と若い指導者の言うことが全く違っていて、若い指導者の場合は「技術的にこうやったら強くなる」と教えてもらえますが、監督は定年退職された方で「おれの時代は大きい技しかやらないで勝てたから、お前らもそれでいけるぞ」としか言われませんでした。「もっと難しい技を知りたいのに」という思いはあります。松原さんのお話では、自分が教えにいかずに、生徒自身が聞きにくるというのはいいなと思います。オレの意見が正しいと押し付けられるよりは、自分の身にもなるし興味も湧くのでいいなと思いました。

真利谷 渡辺さんのお話であったように、部活動だけでなく、その後にスポーツリンクでは別のことをするのは、すごくいいなと思います。一つのスポーツをやっている生徒が多いのかもしれませんが、いろんなスポーツを経験することで、知識の幅が広がるだけでなく活動の中でいろんな交流ができると思います。松原さんのお話では、上の世代から自分の世代、自分の世代から下の世代へとつないでいくというのは、とてもいい話だと思いました。

自分のところも現在は人数が少なく、大阪府のスポーツ少年団に所属している子も少ないし、リーダーも少ないという現状もあるので、自分たちが上から受け継いだことを、自分たちで教えて下の子たちに伝えることを改めて考えていかないといけないと感じました。



Part.2は、メールマガジン11月号に掲載予定です。子どもたちのスポーツ環境についてや第1弾、第2弾を通しての総括などを掲載する予定ですのでぜひご覧ください。お楽しみに！

